

〈物〉の力

—平安貴族のコミュニケーション

岡^{おか}田^だひろみ

一 平安貴族のコミュニケーション

平安時代の男女の恋は「文」を媒介として展開する。女心を掴む和歌を詠もうとするのはもちろん、時節にあった「折り枝」をそえて付けたりもする。

紅梅にさして、その色の色紙に書いて、

なげきつつ涙にそむる花の色のおもふほどよりうすもあるかな（三五六）

かへし、女、

うぐひすの涙は里もなきものをいくらそめてかいろとなるらん（『能宣集』Ⅲ・三五七）

悲しみが深いと涙が洒れて「血の涙」（紅涙）が流れるという発想によった和歌である。女を想って嘆き、血の涙で「花」や「紙」が「紅」に染まる。男が和歌に添えた「紅梅」により、「涙でそむる花の色」が、比喩ではなくあたかも真実であるかのように演出する。そして、それさえも男の想いと比すると「薄」という。春は梅や桜、夏は橘、秋は女郎花、萩、紅葉……、私家集の詞書を通覧するだけでも、現実の生活の場で様々な植物が様々な和歌とともに贈られたさまがみてとれる。

〈物〉の力—平安貴族のコミュニケーション

さらに、物語を紐解くと、上流社会の趣向をこらした恋文の様相が窺える。例えば、『狭衣物語』の中に描かれる、東宮から源氏の宮に贈られた手紙は、源氏の宮の母がわりである大宮に「いとをかしき文」と言わせ、源氏の宮「御みづから」の返歌をうながした風情のある恋文であった。

「春宮の御使参りぬ」と聞きたまへれば、例の心やましくて、御前に参りて見たまへば、母宮もこの御方にて、御文御覧ず。御使は、やがて宮の亮なりけり。女房の袖口なべてならず、出であつもの言ふめり。御文は氷襲の唐の薄様にて、雪いたう積り、えもいはずしみこほりたる呉竹の枝につけさせたまへり。大宮、「いとをかしき御文かな。かやうの折は、御みづからも聞こえさせたまへかし」とのたまはするを、大將は、「などかくせちに聞こえさせたまふらむ」と、ふさはしからず聞きたまひて、うち見やりたてまつりたまへば、いとつつましくて、おほしもかけねば、母宮、「めづらしげなき古めかしさは、いかに見所なうおほさらむ」など持てなやませたまへば、大將の君、「少々の人恥づかしげなる御手ぞかし。今日はまいて見所侍らむかし」とゆかしげにおぼしたれば、「いとあるまじきことにおぼしたるに、いとどかう申したまふ」と笑はせたまひて、「やがて、この御返りは教へきこえさせたまへ」とて、御文も賜はせられたれば、見たまふ。

頼めつつ幾世経ぬらむ竹の葉に降る白雪の消えかへりつつ（東宮）

硯の水もいたうこほりけると見えて、筆涸れに書きなされたる、文字様などこそこまかにをかしげならねど。筆の流れなどはいとあてに、「をかしき御手なりかし」と見たまふ。

東宮は、竹の葉に降る雪が凍りついているように、私も凍りつき消えるばかりである、と源氏の宮の入内を待ち続けるつらさを詠んだ。その和歌は、「氷襲の唐の薄様」に書かれ、「雪いたう積り、えもいはずしみこほりたる呉竹の枝」とともに贈られたのであった。しかも、筆跡も「筆涸れ」に書かれており、「硯の水もいたうこほりける」ことを想像させるという、これ以上ないほどの細やかな趣向であった。和歌の中には「凍る」という言葉は詠みこまれていないが、「紙」「呉竹」「筆跡」によって、源氏の宮が得られず東宮の凍りつく心が示されている。「折り枝」を含む演出によって、東宮の源氏の宮への想いの強さが十分に表現されているといえよう。このような風流かつ贅も尽くした「折り枝」を伴う和歌の贈答は、そうそう現実世界にはなかったかもしれないが、

堀川の中宮に、中納言の君と言ひてきよげなる人さぶらひしを、物など言ひしほどに、みちたふ（か）の少将に住まれて、いく

ばくもなくてとはれずなりにしをききて、女郎花の枯れたる枝につけてやる、

女郎花あきのかぜにしほられて今はかれぬときくはまことか（『大武高遠集』一九）

のように、「女郎花の枯れたる枝」に男の夜「離れ」を揶揄したり、植物ではなく、

鳥の声にはかられて、いそぎいでて、にくかりつれば殺しつとて、羽に文をつけてたまへれば、

いかがとはわれこそおもへ朝な朝なをきかせつつ鳥の殺せば（『和泉式部集』Ⅰ・八七〇）

のように、後朝の別れを促す鶏の声の憎さゆえに「殺しつ」とまで言つて、その証左として文を「羽」に付けて送るなど、現代の我々からすればぎよつとするようなもので、バリエーション豊かな〈物〉が人々の間を行き来した。

これらは和歌を補完する形で付された〈物〉といえようが、和歌ではなく、〈物〉のみを送ることでメッセージを託す場合もある。

ある女に文やる、返事はせで、総角をむすびておこせたれば、

ひろばかりさかりてまろとまろねせむその総角のしるしありやと（『実方集』Ⅱ・一四五）

実方が女に文を送ったが「返事」はなくて「総角」を結んだものをよこしてきた。次のような例もある。

四月一日、ある女の家を過ぐとて、何ごとかといひいれさせて侍りしに、がへりごとをばいはで、山吹の花を、をこせたりしかば、

くちなしのいろにさけばか山吹のすぎゆくはるをとまれともいはぬ（『国基集』八二）

国基は「ある女」の家を通る前に、声をかけるが、女は「かへりごと」は言わず「山吹の花」をよこしてきた。

それぞれ「文」や言葉での男からの誘いに、〈物〉のみで返す。男の問いに対しての返答であるから、男は女が〈物〉に託したであろうメッセージを読み解かなければならない。

『実方集注釈』は補説で「左右に別れている輪を結び合わせた総角によって、離れていても寄り会おうとしていることを伝えようとして女は総角を送ってきた。」¹⁾と記す。この場合は、女も実方に対して好意を持っていることを「総角」にたくすことで、あからさまでなく、間接的に伝えようとしたことになろう。そして、実方は、催馬楽「総角」を引歌としつつ、私と、「まろね」しましょう、「総角のしるし」があるかためししょう、と「逢う」ことをより直接的に詠み誘う。

『国基集』の場合、「山吹」の担う歌ことばとしてのイメージをまずは解する必要がある。山吹は、一重と八重がある。八重山吹は実を結ばず、「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞあやしき」(『後拾遺集』雑五・一一五四)で「蓂」と掛け詞になった和歌が有名であるが、ここでの山吹はおそらく一重であろう。八重の場合は「八重」と記されることが多く、『源氏物語』野分巻で玉鬘の美貌が「八重山吹の咲き乱れたる盛りに露のかかれる夕映え」のようであると夕霧には思われたように、若い美しい女性をたとえられたりもしている。また、その花の色が、くちなし色に似ていることから、「山吹の花色衣ぬしや誰問へど答へずくちなしにして」(『古今集』雑牀・一〇一二)と「口無し」と掛けて返事のないことを詠みこむ。当該歌を読むと、国基は女に対して、「くちなしの色に咲けばか」とさらに尋ねており、「とまれともいはぬ」口無しの山吹であることを難じている。女から贈られた「山吹」を国基は「くちなしの花」(女の比喩)として理解したことがわかる。一方、女の真意は、山吹に「口無し」を込めていたとしても、少しわかりにくいが、男の声かけに対して、「返事をしたくないの」「返事ができないの(口無しだから)」「返事しないで(口無しになつて)」等と言いたかったのだろうか。〈物〉は言葉ではないから、そこに何を読みとればよいか、贈り主がどのようなメッセージをこめていたのか、受信者や読者は想像力をはたらかせなければならない。ただ、これらの〈物〉は「返答」としての機能を担わせてあるので、その文脈において解することになる。

こういった〈物〉の含意性に注目し、利用したコミュニケーションが、次にあげるような、〈物〉からはじまる対話であろう。

おなじ所(麗景殿女御方の女房)に、藤の花を山吹にそへて、これはいかにとあれば、

ふたごころありける人のをる花はひとついろにも咲かずぞありける(『輔親集』I・六二)

「藤」と「山吹」はともに晩春を飾る景物であるが、親しい女房からそれらが一緒に贈られてくる。しかも「これはいかに」という挑戦的なメッセージとともに。藤も山吹も歌ことばとしてのイメージをそれぞれ担う植物であるが、「ふたごころありける人」が折るから「一つ色」にも咲かない(藤は紫色、山吹は黄金色)と「花」の「色」をとりあげて、輔親は女房をやりこめることに成功している。そもそも、この贈り主の女房は、「藤」と「山吹」という二つの〈物〉に対して特定の、限定された〈意味〉を持たせてはいまい。限定していないからこそ、相手に「これはいかに(これはどうでしょう?)」という謎かけのような形で発信しているのだ。

このようなやりとりは、

入道撰政八重山吹をつかはして、いかが見ると言はせて侍りければよめる

たれかこの数はさだめし我はただとへとぞ思ふ山吹の花（『詞花集』恋・二八二）

弥生の月、竜門にまゐりて、滝のもとにてかの国の守義忠が、桃の花の侍りけるを、いかが見ると言ひ侍りければよめる

物言はば問ふべきものを桃の花いく代か経たる滝の白糸（『後拾遺集』雑四・一〇五六）

二月ばかり、二条の大殿より、紅梅をいかが見るとてたまはせたらば、

ひとえだも身にしむ梅のにはひかな小高きやどをおもひこそやれ（八六）

御返事、

はることにほひまさればむめのはな小高きやどは千代までぞみん（『周防内侍集』八七）

といった多くの例から窺えるように、当時盛んにおこなわれたコミュニケーションの一つといえよう。〈物〉を受信者がどう読むか、という知的ゲームとも言ひ換えられる。本稿では、こういった〈物〉からはじまる対話に注目することで、平安文学作品の表現を解き明かしてゆきたい（20）

二 『枕草子』の場合

〈物〉を契機としてのやりとりは『枕草子』にも描かれている。

殿上より、梅の花散りたる枝を、「これはいかが」と言ひたるに、ただ、「早く落ちにけり」といらへたれば、その詩を誦じて、殿上人黒戸にいとほくゐたる、上の御前に聞しめして、「よろしき歌などよみて出だしたらむよりは、かかる事はまさりたりかし。よくいらへたる」と仰せられき。（二〇一段）

殿上から「梅の花散りたる枝」を差し出され「これはいかが」と言われたのに対し、清少納言が「早く落ちにけり」と『和漢朗詠集』（上・春）にも収載された大江維時の詩「大庾嶺之梅早落、誰問粉粧。匡廬山之杏未開、豈趁紅艷。」を踏まえて答えたことで有名な段である。この章段は短いながらも、この一連の応答を聞いた帝の「よくいらへたる」という言葉まで記しており、清少納言の「自讃

〈物〉の力—平安貴族のコミュニケーション

談」として位置づけられている⁽³⁾。

《物》を提示されたことに対する答えとして、「ただ」「早く落ちにけり」と一言、和歌ではなく、女でありながら梅の名所を詠み込んだ漢詩の一節を口ずさんだことに、清少納言の機智が発揮されている。しかし、「梅の花散りたる枝」に対して、「梅の花が」「早く落ちにけり」という漢詩で答えるというのはあまりにも場につきすぎてはいないだろうか。「これはいかが」と問われたとき、解答者は出題者にいかに逆襲するかということも、これらの一連の連想ゲームの妙味であったと思われる。その意味で清少納言の答えは従来の理解だと、女ながらに漢詩を翻案した「優等生」的な模範解答に過ぎない気がして物足りないように感じるのである。

そんな中、新見を提出された富川知香氏の本章段に關しての論に従って解すると、この段における清少納言の返答が、先の漢詩とは別の意味も含んでいることが窺える⁽⁴⁾。氏は、「落つ」という語に着目し、「名にめでて折れるばかりぞおみなへし我おちにきと人にかたるな」(『古今集』・仮名序・秋上・二二六)の古歌にあるように、女郎花に落ちる、女に墮落することを「女郎花Ⅱ女」「落つⅡ墮つ」と見立てられていることをふまえ、当該場面での清少納言の「早く落ちにけり」とは、「梅の花Ⅱ女」が「落ちⅡ墮ち」てしまったことを暗に示している、という。具体的には氏の論を参照されたいが、「早く落ちにけり」とは、定子サロンの女房たちが、次々と道長側に落ちてゆくことが寓意されているというのである。だとすれば、帝の「よろしき歌などよみて出だしたらむよりは」といった遠まわしな言い方も、清少納言の返答の裏にこの寓意を読みとつたからのように思われてくる。

そもそも、殿上人は何を意図して、「梅の花散りたる枝」を贈ったのか。「梅」であったのは季節によるものが大きいだろうから、特に留意すべきはこの梅が「散りたる枝」だったことだろう。世の無常を知れ、というのでもあるまいに、散った枝を贈るというのはどういう場合が考えられるのだろうか。

閏三月、花山院の桜の花の散りたる枝につけてたまへる

さくら花春くははれるとししもぞつねよりも猶ちりまさりける (『大式高遠集』一)

ここでは、「桜の花の散りたる枝」とともに和歌が贈られてくる。ここでの枝は、花山院の栄華が過ぎ去ったことを暗に示しているのだろう。枯れた花を贈る場合もある。

かよひ侍りしをんなの忘れがたになりしに、ちいさき木のもとす糸の枯れたりしにつけて、をんな、

わびつつはすゑのよをだにたのむべきそれしもぞまつかれまさりける（『兼澄集』Ⅱ・四三）

「通ひはべりし女の忘れがた」とあるから、「木のもとすゑ枯れた枝」とは男が離れてゆくことと通じる。変色した菊の花を贈るという行為も多い。

ありし女の、男につきて里にありしに、十月ばかり、うつろひたる菊につけてやる

みしよりもいとどかれゆくしらぎくのうつりごころは花もありけり（『大武高遠集』三二七）

当時は変色した菊を最上の美としましたが、この場合は「ありし女の男につきて」とあるから、女の心変わりを揶揄したものとしてとらえられる。

以上のように、盛りではなく、散ったり、枯れたり、変色した花や枝を贈る行為には、「ひと」の境遇を寓意する表現となっていることがままたるようだ。この『枕草子』一〇一段の場合も、同様に考えらるるではあるまいか。となると、ここでのやりとりが、いかに多義的なものであったか、ということに気づかされる。

殿上人が「梅の花散りたる枝」を贈ってきた意図であるが、まずは、清少納言についての揶揄、ととらえることができるだろう。身体的なもの（散った花＝老いた女）という比喻として。さらに、清少納言の境遇についての揶揄である。定子側は随分衰退したね、というような。その他、ほかにもありそうだが、「散った花」である以上、清少納言賛美だとか、定子サロン賛美、という風には読めそうもない。

では、清少納言はどう読みとつたのか。まずは、自らの容姿についての揶揄として。「そうよ。もう衰えているわよ。」という。しかも、ただその揶揄を受け止めたのではない。「早く落ちにけり」とあるから、「早く」つまり前々から落ちていた、私が老いたのは今に始まったことではない、今頃気付いたの？という切り返しである。次に、定子サロンの女房としての公的な答え。それは従来指摘のある、大江維時の漢詩をふまえての返答となる。最後に、富川氏が指摘されたような定子サロンの女房たちを墮とした男たちへの揶揄である。

清少納言は「これはいかが」といって殿上より「梅の花散りたる枝」を差し出された。男たちのぶしつけな行為に少しもひるまず、「早く落ちにけり」という一言の中に、タテマエとホンネを表現したのだ。それは〈物〉が担う多義的な要素を逆手にとった、見事な返答

であつたといえる。

一〇一段と類似するといわれる章段がある。

村上の先帝の御時に、雪のいみじう降りたりけるを、様器に盛らせたまひて、梅の花をさして、月のいと明かきに、「これに歌よめ
いかが言ふべき」と兵衛の蔵人に給はせたりければ、「雪月花の時」と奏したりけるをこそ、いみじうめでさせたまひけれ。「歌な
どよむは世の常なり。かくをりにあひたる事なむ言ひがたき」とぞ仰せられける。(一七五段)

村上朝のエピソードとして記されたものである。村上帝が「雪のいみじう降りたりけるを、容器に盛らせたまひて、梅の花をさし」
て兵衛の蔵人という女房に、「これに歌よめ。いかが言ふべき」といつて下賜された。女房は、「雪月花の時」と白居易の詩句（和漢
朗詠集）交友をもつて返答し、それが村上帝に大層賞賛された、という話となつてゐる。話の展開の仕方が一〇一段と極めて類似す
るようにも見えるが、決定的な違いがある。それは一七五段では、〈物〉が「これに歌よめ」といった言葉をもつて提示されている、
ということである。つまり、この段における贈り主である帝は題詠的な返答を求めているのだ。〈物〉を媒介として帝と女房のコミュ
ニケーションには違ひないが、この場合の〈兵衛の蔵人〉という女房は他の人物に入れ替え可能な女房であつて、「形式」や「解答」
の幅は極めて限定されているように思われる。

一〇一段の位相と通じるのは、一七五段よりもむしろ一三一段であらう。

五月ばかり、月もなういと暗きに、「女房や候ひたまふ」と、声々して言へば、「出でて見よ。例ならず言ふは誰ぞとよ」と仰せら
るれば、「こは、誰ぞ。いとおどろおどろしうきはやかなるは」と言ふ。物は言はで、御簾をもたげて、そよろとさし入るる、呉
竹なりけり。「おい。この君にこそ」と言ひわたるを聞きて、「いざいざ、これまづ殿上に行きて語らむ」とて、式部卿宮の源中将、
六位どもなどありけるは、いぬ。(一三一段)

「こは、誰ぞ。いとおどろおどろしうきはやかなるは」という問いに対して、相手は「物も言はで」突然「呉竹」を差し出す。それ
を見て清少納言は「おい。この君にこそ」と発言することではじまった当該場面は、発言の典拠や当該場面をどう読み解くか、という
ことについての論考が重ねられている段でもある⁵⁶。改めて丁寧な読解が必要であらうから、ここでは、この章段の要も〈呉竹〉と
いう〈物〉の提示ではじまつたということのみをおさえておきたい。「物も言はで」御簾から「呉竹」がのぞく。一〇一段と同様、清

少納言は「呉竹」という〈物〉に見たメッセージを解いて返答しているのである。〈物〉ではじまるコミュニケーションは、問いのみならず返答を〈読む〉ためにも想像力を必要とする。

三 「いかが見る」という謎かけ―『和泉式部日記』の場合

〈物〉からはじまる対話で最も有名な場面の一つに、次の「和泉式部日記」の冒頭部、帥の宮敦道親王と和泉式部のやりとりを挙げることができるだろう。亡き恋人為尊親王の一周忌を前に、親王の弟の帥の宮より、小舎人童を介して「橘の花」が届けられる。その際、帥の宮は、「いかが見たまふ」と言つて渡すよう、小舎人童に命じるのだ。次に該当場面を掲出する。

夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築土の上の草青やかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、誰ならんと思ふほどに、故宮にさぶらひし小舎人童なり。あはれにもののおぼゆるほどに來たれば、「などか久しく見えざりつる。遠ざかる昔のなごりにも思ふを」などいはすれば、「その事とさぶらはでは、なれなれしきさまにやとつつましうさぶらふうちに、日ごろは山寺にまかり歩いてなん。いとたよりなくつれづれに思ひたまうらるれば、御代りにも見たてまつらんとてなん帥の宮に参りてさぶらふ」とかたる。「いとよきことにこそあなれ。その宮はいとあてにけけしうおはしますなるは。昔のやうにはえしもあらじ」などいへば、「しかおはしませど、いとけちかくおはしまして、「つねに参るや」と問はせおはしまして、「参り侍り」と申しさぶらひつれば、「これも参りて、いかが見たまふとてたてまつらせよ」とのたまはせつる」とて、橘の花を取り出でたれば、「昔の人の」と言はれて、「さらば参りなむ。いかが聞こえさすべき」と言へば、ことばにて聞こえさせむもかたはらいたくて、「なにかは、あだだしくもまだ聞こえたまはぬを、はかなきことをも」と思ひて、

薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると（女）

と聞こえさせたり。まだ端におはしましけるに、この童かくれのかたに気色ばみけるけはひを、御覧じつけて、「いかに」と問はせたまふに、御文をさし出でたれば、御覧じて、

〈物〉の力―平安貴族のコミュニケーション

同じ枝に鳴きつつをりしほととぎす声は変はらぬものと知らずや（宮）

と書かせたまひて、賜ふとて、「かかること、ゆめ人に言ふな。すぎがましきやうなり」とて、入らせたまひぬ。もて来たれば、をかしと見れど、つねはとて御返り聞えさせず。（『和泉式部日記』十八・十九頁）

和泉は「橘の花」を見て自然と「昔の人の」という『古今集』（夏・一三九）の歌「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」を口ずさみ、帥の宮への返答を思案する。そこで詠んだのが、「薰る香によそふるよりは」という和歌であった。この和歌は返答でありながらも、一方で結果的に帥の宮への贈歌ともなっており、長年、和泉が「あなた（帥の宮）の声と故宫の声が同じかどうか聞きたいわ」という宮を誘う和歌として解されてきた。

しかし、日記の冒頭は「夢よりもはかなき世の中を」と為尊親王への追慕ではじまっており、いきなり和泉が為尊親王の弟である宮に「（あなたの声を）聞かばや」というのは、いくら色好みのイメージが強い和泉であっても違和感がある。現行の注釈書のほとんどが宮を誘うと解しながらも、この十数年、たびたび従来の解釈に異をとる読みが出され続けているのも肯ける。

後藤祥子氏は当時愛唱された時鳥詠に、

さつきまつ山郭公うちはぶき今も鳴かなむ昨年の古声（『古今集』夏・一三七）

去年の夏鳴きふるしてし郭公それかあらぬか声の変らぬ（『古今集』夏・一五九）

亡き人の宿に通はばほととぎすかけて音にのみ泣くと告げなむ（『古今集』哀傷・八五五）

といった歌があることをふまえ、「和泉の聞きたい「同じ声」とは、弟宮の声を意味する以前に、時鳥にたとえられる死者・兄宮その人の声」であると述べている^{〔6〕}。亡き人を偲ぶだけでなく、亡き人の声も聞きたい、という願いである。近藤みゆき氏も「亡き兄宮様との昔を偲ぶのなら、私は花橘の香になぞらえるより、郭公によそえて偲び、その声を聞きたい」^{〔7〕}と、故宫思慕を詠んだものと注釈する。山本淳子氏もそれに賛同する^{〔8〕}。これらの読みは、和泉の和歌を「誘う歌」として読む従来の解釈よりも穏当で首肯できる。その中で、近藤みゆき氏が、和泉の和歌の引歌として、

いその神ふるき都の時鳥声ばかりこそ昔なりけれ（『古今集』夏・一四四）

を指摘し、山本淳子氏が、

五月待つ山時鳥うち羽ぶき今も鳴かなむ去年のふる声（『古今集』夏・一三七）

を引歌として指摘していることに、着目してみたい。どちらがこの場にふさわしいかは一旦置くとして、具体的な引歌を匂わせることで、帥の宮の「橘」の意味を理解するだけでなく、「打てば響くような女の呼応の見事さ」^⑨や、「帥宮の「問い」を正確に理解したことを示し、それに真つ向から切り返す^⑩」す和泉の返答が、帥の宮の心をとらえて宮の「和歌」を引きだしてゆくという両氏の指摘は留意すべきだろう。

そもそも、帥の宮は「橘の花」を「いかが見たまふ」といって和泉に贈っており、先にあげた『輔親集』の藤と山吹ではないが、「橘の花」から想起される『古今集』一三九番歌は言わずもがなの古歌であって、おそらくそれ以外の要素も含めた上で「どのように見るか」ということをためしているのだ。その意味で、これまで親王の返歌から和泉の和歌を詠んだために生じた「誘う歌」という読みがあったように（もちろん、和泉の和歌に誤読が生じる隙があったとしても）、和泉の和歌や口ずさんだ「昔の人の」という言葉にひきずられる形で、帥の宮の「橘の花」をも読んではいないだろうか。

橘の花は、「永遠性のイメージとともに、他界や異郷へと通じる懐古の情」^⑪を呼び起こす花であった。「橘の花」が「昔の人」である「故宮」を想起させるのは言うまでもなく、それだけならば「いかが見給ふ」という言葉はなくとも「橘の花」のみで十分なメッセージになるはずで、どう見ると聞くからには、いろんな解が可能なのである。逆に言えば、「正答」というものはないのである。例えば、橘の永遠性に重きをおけば、亡き宮を永遠に愛し続ける和泉という姿を読むこともできたかもしれない。しかし、和泉はそうはしなかった。和泉は「薫る香によそふるよりは」と自分が「橘の花」から導きだした『古今集』一三九番歌を意識しつつも、やりわりと否定し、「郭公」で故宮を偲びたい、と詠んだ。「よそふるよりは」という言い回しにおいて、上の句が既に、帥の宮の「橘の花」に対してずらし、切り返している。再掲出になるが、

入道摂政八重山吹をつかはして、いかが見ると言はせて侍りければよめる
たれかこの数はさだめし我はただとへとぞ思ふ山吹の花（『詞花集』恋・二八二）

弥生の月、竜門にまゐりて、滝のもとにてかの国の守義忠が、桃の花の侍りけるを、いかが見ると言ひ侍りければよめる
物言はば問ふべきものを桃の花いく代か経たる滝の白糸（『後拾遺集』雜四・一〇五六）

二月ばかり、二条の大臣より、紅梅をいかが見るとてたまはせられたば、
ひとえだも身にしむ梅のにはひかな小高きやどをおもひこそやれ（八六）

御返事、

はることににはひまさればむめのはな小高きやどは千代までぞみん（『周防内侍集』八七）

といった返答としての和歌が、〈物〉の範圍を超えない詠みぶりであることと比較しても、「橘の花」から「郭公」にずらした機転、「香」から「声」にずらした和泉の和歌は、帥の宮も満足いくものであったに違いない。和泉と帥の宮の親交は「橘の花」を契機に、和歌の贈答の場ではじまってゆくが、和泉が帥の宮の期待に添わない返答をしていれば、おそらく二人の恋すらなかったかもしれない。

そのようにも思わせられるのは、『平中物語』の一段において、「蔦のいみじくもみぢたる葉」をどのように見るか、という問いに對して答えた男の和歌を読んで、女が「返し」もしくなつた、という話があるからである。

時しもあれ、秋のころにさへありければ、いともの心細うおほえて、心一つをなぐさめわぶる夕暮にかくいふ。

憂き世には門鎖せりとも見えなくになぞもわが身のいでがてにする（男）

と言ひつつ、ながめたるあひだに、なまいどみてものなどいふ人のもとより、蔦のいみじくもみぢたる葉に、「これはなにとか見る」とて、おこせたりければ、かくいひやる。

憂き名のみたつたの川のもみぢ葉はもの思ふ秋の袖にぞありける（男）

返しもせず。（『平中物語』一段）

一段の冒頭は、女一人を男二人でとりあうという話から始まる。身分高い男が負け、平中らしき血筋のみが良い男が女を手にいれたために、身分高い男の嫉妬からの、誹謗中傷の末、出仕しづらくなって、帝の不興までもかい、不遇の時を過す。出家したくても、両親のことを思うとそれとできない。最初の詠「なぞもわが身のいでがてにする」というのは、出家できない自分の不甲斐なさを嘆いたものでもあるだろう。そんな折、「なまいどみてものなどいふ」女から、「蔦のいみじくもみぢたる葉」が贈られてきた。「これはなにとか見る」という言葉とともに。平中は、赤く染まった蔦の紅葉に自らの境遇をたとえ、「いやな噂がしきりに立つ私、見事さは龍田川の紅葉というべきですが、じつは物思いに泣く血の涙で染まった私の袖と同じなのですよ」⁽¹²⁾と答える。紅葉の色を血涙にたと

えて苦しみの激しさを吐露する。しかし、女は「返しも」しなかった。

ここで、なぜ女が返歌しなかったのか、ということを考えてやはりそれは、男の和歌が女の求めていた答えと外れていたからではないか。紅葉を詠んだ和歌には、

弥生ばかりに、かへでのみちのいとおもしろきを折りて、女のもとに、道よりいひやる、

君がため手折れる枝は春ながらくこそ秋のもみちしにけれ（『伊勢物語』二〇段）

のように、春なのにあなたへの「思ひ」で「緋」に染まったと、恋心の強さを示したり、

女かぎりなくはづかしとおもふほどに、この男のもとより、女の親の家は五条わたたりなるに、きて、かきのもみちにかくかきつけたり

ひとすまずあれたる宿を来てみればいまだこの葉は錦おりける（一）

女いと心うきものから、あはれにおほえければ、

涙さへ時雨にそへてふるさとはもみちのいろもこそぞまされる（二）

とかきてねずみもちにつけてやりける、九月ばかりのことなるべし、男もみてかぎりなくめでけり。（『伊勢集』）

のように、紅葉の美しさを女の美しさに見立て「この葉は錦織りける」と詠んだり、

前近き透垣のもとに、をかしげなる櫛の紅葉のすこしもみちたるを折らせ給ひて、高欄におしからせ給ひて、

言の葉ふかくなりけるかな

とのたまはすれば、

白露のはかなくおくと見しほどに

と聞こえさするさま、なさけなからずをかし、とおぼす。（『和泉式部日記』六十三頁）

のように、あえて「すこしもみちたる」葉を送ることで二人の愛の「言の葉」の深さと対比させたり、男女の恋に関連して様々に詠むことができる（『物』）であった。平中の女の場合、「男から相応の恋歌」^③を女は期待していたと読めそうである。読めそう、というのは、女の真意は女にしかわからないが、文脈と（もみじ）が担う「歌ことば」としてのイメージからそのように想像して、ひとまず考

えられるということである。その前提にたてば、男からの和歌を読んで女はあきれて返答する気にもならなかった。では、はたして平中は、女のそういった心情を想像することができなかったのだろうか。いやそうではあるまい。女の心情を察しつつも、自らの悲嘆が大きく、女になくさめてもらいたかったのかもしれない。もしくは「なまいどみて」言い寄ったという、いいかげんな気持ちではじまった恋の相手だから、女に配慮する必要も感じなかったのかもしれない。そのため恋ではなく、自らの苦境を和歌に詠み上げた。更に平中の肩をもって本文を読めば、「恋」の誘いとしての「葦のいみじくもみちたる葉」を想起しつつも、あえてずらして答えたともいえる。ただし、平中の和歌にゆとりはなく、極めて悲しみに沈んだ内向的な重い歌であるゆえに、「これはなにとか見る」というコミュニケーションを発展させる原動力には成りえなかったのである。平中と女の物語はこれ以後描かれない。

再度、『和泉式部日記』の場合に戻りたい。帥の宮から贈られた「橘の花」、それは、恋人を亡くして悲しみに暮れている和泉への慰めであり、見舞いでもあったろう。しかし、そこに「いかが見たまふ」という言葉が付されたとき、たちまち挑戦的な〈物〉としても働いてゆく。

先に、近藤みゆき氏と山本淳子氏がそれぞれあげた引歌について、どちらが適当であるかということを書留したが、和泉の返答も「答え」であり「問い」であったとすればどうであろうか。『古今集』一四四番歌をふまえれば、「声ばかりこそ昔なりけれ」という古歌がいうように、同じ声であるかどうか故宮の声を聞きたい、という「過去」をふりかえる懐旧の情を下敷きにした返答になろうし、『古今集』一三七番歌をふまえれば、「今も鳴かなむ去年のふる声」でと、故宮が生きていたときと同じ声で「今」鳴いてほしい、という「現在」を志向した返答になろう。複数の引歌をちつかせて、帥の宮に対して、「あなたは私がどういう心情がわかるかしら」と問うているのである。

後藤祥子氏は、『蜻蛉日記』中巻の安和の変に関わる作者と愛宮の贈答に用いられた消息の折り枝に着目され、記される「いと葉茂うつきたる枝」や「むろの枝」、「色変りたる松」には、「悲惨な現実を捨象した純粋なことは遊びの世界」を見、「どうする事も出来ない絶望的な状況であるだけ、つかのま、引歌の謎によって知的ゲームに没入するのはむしろ救い」であったと述べている¹⁴。『蜻蛉日記』の当該場面において、「いかが見る」のような問いかけはないが、なくともそこに知的ゲームの要素が入っているとすれば、『和泉式部日記』の冒頭にあるような、帥の宮の行為も、謎かけをもちかけること自体に、和泉を慰めるという真意があったように思うのである。

「橘の花」を「いかが見給ふ」と言って贈ってきたとき、「古今集」一三九番歌「昔の人の袖の香ぞする」という世界は当然すぎて返答としては逆に捨象されよう。和泉の返歌は「昔の人の袖の香」を捨てる所からはじまったのだ。もしかすると、帥の宮は「橘の花」という万人周知の〈物〉を贈ることで、〈ことば〉の上で「昔の人」（故宮）を捨てさせようとしたのではなかったか。

『和泉式部日記』の一連の応酬が「つねはとて御返り聞えさせず」で締めくくられるのも、「橘の花」をめぐる〈場〉は一旦締めくくる必要があったからであろう。帥の宮と和泉の交流は謎かけゲームではじまるが、二人の恋物語は、和泉の帥の宮への返歌ではなく、改めて送られてくる帥の宮からの贈歌によって展開してゆく。

以上のように、それぞれの場面から、平安時代の貴族の人々が生きた〈場〉の豊かな言語空間を窺うことができる。〈物〉を贈る、というコミュニケーションは、時に日常語としての「言葉」はもちろんのこと、「和歌の言葉」も越える形で、メッセージ性を担わされて人と人の間を往還する。和歌の贈答とは違った、〈物〉が生み出す表現世界は、平安時代の文学作品の一つの特質としてとらえることができるだろう。そして、一義ではありえない〈物〉が内包する表現性を理解した上で作品を読み直す必要があるかと思うのである。

(1) 『実方集注釈』（私家集注釈叢刊）

(2) 〈物〉の〈言葉〉としての機能に触れて論じたものに、以下の論がある。小川幸三「紫式部日記」「これ、遅くては悪からん」鶏助——〈物ことば〉論序説のための序章——」（『国語国文 研究と教育』二〇〇三・一二）、本田恵美「『伊勢物語』における〈物ことば〉表現」（『国語国文 研究と教育』二〇〇六・三）、富川知香「落ちた花たちへの思念——『枕草子』一〇一段「殿上より」の段臆説——」（『国語国文 研究と教育』二〇〇六・三）、拙稿「〈物ことば〉と想像力——『源氏物語』帚木巻「撫子」の折り枝をめぐる——」（『国語国文 研究と教育』二〇〇六・三）、上野英子「〈物〉の思念を紐解く——〈物ことば〉の構造と特徴の考察——」（『国語国文 研究と教育』二〇一〇・二）。本稿では特に、「いかが見る」という問いとともに提示された〈物〉についての表現性を考察している。〈物ことば〉という用語を用いてはいないのはそのためであるが、本稿で扱う〈物〉も〈物ことば〉の範疇にある。

(3) 新朝日本古典集成（新潮社）頭注。日向一雄「枕草子聖代観の方法——「陰陽の整理」の観念を媒介にして——」（『国語と国文学』一九九〇）の力——平安貴族のコミュニケーション

九三・九。

(4) (2) の富川氏の論文。

(5) 古瀬雅義「この君にこそ」という発言——典拠の「空宅」と清少納言——（『国語と国文学』一九九七・一）、中田幸司「枕草子」五月ばかり、月もなういと暗きに」章段——「呉竹」の機能と〈知的な遊び〉——（『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』二〇〇八・三）

(6) 後藤祥子「王朝和歌の心」（『王朝和歌を学ぶ人のために』世界思想社・一九九七）。一方で、武田早苗氏は、「誘う歌」という解釈は否定するものの、時鳥に故宮の声を聞きたい、というところまでは読めないとし、「橘」の答えとしての「郭公」であることに着目した上で、「橘の花が昔の香と変わらない香を匂わせているのに対し、同じく懐旧の情を催させる郭公の声が昔とどうかを確かめたいの意である。つまり、「宮」が花橘の香で懐かしむならば、「女」は、郭公の声で「故宮」を偲ぶという歌であり、花橘の折り枝に対する返礼として、挨拶の範囲を越えたものではない」（『和泉式部日記』冒頭部二首についての「私見」『相模女子大学紀要』一九九八・三）とする。

(7) 近藤みゆき「和泉式部日記」（角川ソフィア文庫 二〇〇三・十二）解説

(8) 山本淳子「和泉式部日記」冒頭歌「薫る香に」と古今集」（『いずみ通信』和泉書院二〇〇八・四）

(9) (7) に同じ。

(10) (8) に同じ。

(11) 秋山虔編『王朝語辞典』（東京大学出版会）

(12) 『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』（新編日本古典文学全集）現代語訳

(13) (12) 頭注。

(14) 後藤祥子「秘められたメッセージ——『蜻蛉日記』の消息の折り枝——」（『国文目白』一九九四・一）

※『枕草子』『和泉式部日記』『平中物語』の本文引用は、新編日本古典文学全集（小学館）、『狭衣物語』は新潮日本古典集成（新潮社）による。私家集は私家集大成、その他の和歌の引用は新編国歌大観によるが、仮名遣い等私に改めた所がある。